

蘭田香融先生のご逝去を悼む

その他のタイトル	Commemorating Prof. Emeritus SONODA Koyu
著者	西本 昌弘
雑誌名	史泉
巻	125
ページ	1-3
発行年	2017-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/16348

藺田香融先生のご逝去を悼む

西 本 昌 弘

私たちの敬愛する藺田香融先生には、去る二〇一六年八月四日、入院先である和歌山市の堀口記念病院において逝去された。享年八十七。二〇〇九年三月の傘寿のお祝い会前後からは、肺の機能を補うため酸素ボンベを携帯しておられたが、まだまだお元気で各地のシンポジウムや博物館などに出かけておられた。今年一月に腰を痛めて入院されたのは、さすがに心配であったが、暖かくなればご退院の予定とうかがい、樂觀していたので、急な訃報に接し、ただただ驚くばかりであった。八月八日にお通夜、九日に告別式が行われたが、猛暑の中、宗門関係、和歌山市・和歌山県関係、関西大学・京都大学関係、日本古代史・仏教史関係などの弔問者が大勢詰めかけ、先生との別れを惜しんだ。

藺田先生は、一九二九年（昭和四）に和歌山市でお生まれになり、第三高等学校をへて、一九四八年に京都大学文学部史学科に入学された。一九五一年のご卒業後は、同大学大学院に進学された。一九五三年六月に関西大学に助手として迎えられ、専任講師・助教授をへて、一九六五年に教授に昇任された。その後、一九九九年（平成十一）に定年退職されるまで、実に約四十六年の長きにわたって関西大学に在職された。この間、恩師の横田健一先生とともに関西大学古代史研究会を主宰され、多くの古代史研究者・考古学研究者を育てられた。また、関西大学史学・地理学科のまとめ役として長年骨を折り、同窓会の創設・運営にも尽力された。本学の史学・地理学部門が長く繁栄したのは、藺田先生が表看板として活躍されただけではなく、縁の下の力持ちとしても支えて下さったことが大きく与っている。

第三高等学校において横田健一先生、京都大学・同大学院において柴田實・赤松俊秀・那波利貞の諸先生に学び、日本古代の仏教史・政治史の研究を志された藺田先生は、大学院生時代から粒ぞろいの名論文を次々に発表され、やがて戦後を代表する古代史家として万人の認める存在となられた。『日本古代財政史の研究』（一九八一年）に結実した正税帳や出挙に関する緻密なご研究、『平安仏教の研究』（一九八一年）に集成された山林仏教や最澄の東国伝道に関する透徹したご研究、『日本古代の貴族と地方豪族』（一九九二年）



1999年3月13日 古稀記念祝賀会にて

にまとめられた藤原仲麻呂や紀国造の精密なご研究などは、他の追隨を許さない重厚な業績として、現在も通説の地位を保っている。また、紀伊半島における仏教関係史料を集成し、詳細な解説を付した『南紀寺社史料』（二〇〇八年）は、二〇余年間にわたる共同研究の成果を凝縮したものである。さらに、二〇一六年二月に刊行された『日本古代仏教の伝来と受容』には、かの有名な問写経や最澄の思想に関するご論考はいままでもなく、アジア全体を視野に入れて仏教の伝播を論じた力作が収録されており、米寿を迎える八十七歳でのご出版に、受講生一同、大変驚くとともに、大いに勇気づけられたことであった。

蘭田史学の真骨頂は、精緻な実証と明快な論理によって、説得力あふれる新見解を打ち立てられるところにあるが、その背景には、広い視野から物事の本質を見抜く卓越した能力を備えられていたことがあろう。先生の学問に魅了された研究者は数多く、各地の大学から先生を慕う門下生が集まってきた。先生の探究心は病床でも衰えることがなく、最澄の「照千一隅」問題や「石山本願寺」の呼称問題の行方に最後まで関心を寄せ、先生なりの解決を目指されていた。研究へのあくなき執念には感じ入るばかりである。

大学運営の面では、一九六九年と一九七四年に文学部長を務められた。最初の学部長時代は関大の学園紛争がもつとも激しくなった時期で、先生は学長事務代行代理に任命され、難局の收拾に当たられた。このとき先生は、『岩波講座日本歴史』に「国家仏教と社会生活」というご論考を執筆中であったが、多忙のためなかなか進捗しなかったため、学生・機動隊が取り囲む夜中の関西大学まで、岩波書店の重役が原稿の督促に来られたというエピソードを、近著のあとがきで披露されている。関大古代史研究会の先駆けとなる『日本紀輪読会』が、先生と学生三名とはじまったのも、この学園紛争の年であった。その後、関西大学の百周年にあたっては、『大学百年史』の執筆・編集・監修に奔走され、百周年記念事業としてインドの祇園精舎遺跡を発掘することが決まると、先生は副本部長に就任され、副本部長の網干善教授を支えながら、日本・インドの共同発掘を指揮された。

先生は学外でも、さまざまな分野で活躍された。一九六三年以降、和歌山市では岩橋千塚をはじめとする古墳群の発掘調査を牽引され、一九七八年には和歌山県野上町の小川地区で天平年間の「御毛寺知識経」を含む大般若経六〇〇巻を発見し、これを学界に紹介さ

れた。また、兵庫県史・和歌山県史・吹田市史・和歌山市史の編纂に尽力された。一九八九年に和歌山市の和歌の浦において「新不老橋」の建設計画が持ち上がると、先生はこの車道橋は和歌の浦の歴史的景観を破壊するものであるとして反対する住民訴訟の原告団長に就任された。これは住民の景観利益に注目した最初の訴訟として画期的なものであったが、先生は研究に対すると同じ厳しさをもって、社会正義を追求したのであった。さらに、奈良県立橿原考古学研究所の指導研究員や研究顧問を長く務められ、仏教史学会会長、大阪歴史学会代表委員・同事務局長を歴任されるなど、全国的な学会活動の面でも大きな役割を果たされた。

最後に教育の面では、先生は大変厳しい指導をされたと聞き及ぶ。先生の犀利な頭脳は、学生・院生の報告や論文の問題点・誤りを瞬時に見破ったのではなからうか。その一方で、学部生のゼミ旅行や大学院生の研修旅行を熱心に催され、日本各地の史跡や寺社を訪ねては、学生・院生との交流を深められた。普段の教室では目にするのではない先生の一面に触れて、認識を改めたり、親近感を深くした人も多かったに違いない。先生は卒業生の行く末にも細やかな配慮を忘れなかったという。本務校以外でも、先生は東北大学・京都大学・大阪大学・富山大学などにもご出講され、各地に門下生を増やしていかれた。

蘭田先生のご発案で、二〇一〇年三月から年に一回、同窓会を兼ねた関西大学古代史研究会の懇談会・懇親会が開催され、新大阪・関西大学・和歌山市などと会場を変えながら、二〇一四年三月まで継続された。先生みずから「法師天皇考」、「本願寺史への一断想」などと題して講演され、横田健一先生ご夫妻もお招きして、新旧会員の交流をはかる楽しい会となった。若い学生・院生が蘭田先生の警咳に接するよい機会ともなり、先輩諸氏と懇親を深める貴重な時間ともなった。最後まで学問への探究心を失わず、門下生・受講生とともに楽しく学ぶことを実践された先生には、まことに頭の下がる思いがする。先生の生前のご指導とご厚情に対して、心から感謝申し上げます、謹んでご冥福をお祈りいたします。

(関西大学文学部教授)